

漢詩神奈川

第16号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市栄区笠間
5-3-2-103

TEL-FAX
045-895-2662

発行人 岡崎 満義
編集人 桜庭 慎吾

県連総会開かる―活動の新しい芽が出てきた―



研修会での岡崎会長

五月二十一日、薔薇が満開の港の見える丘公園内の県立近代文学館大ホールにおいて、神漢連の第九回総会が開催されました。

顧問であられる石川忠久先生、窪寺啓先生、浅岡清明先生のご臨席をいただき総勢八十四名の出席でした。

岡崎満義会長の挨拶概要は次の通りです。

一、本来の活動も順調ですが、それ以外の小さな活動が芽生えてきました。

つまり、新百合ヶ丘・産経学園での漢詩初心者講座(講師水城まゆみ副会長)・藤沢市での朝日カルチャー漢詩教室(講師古田光子理事)が軌道に乗ってきたことです。

二、初心者入門講座は八期生が三十二名勉強中ですが、これは連盟の主力活動として継続してゆきます。

四期生の詩游会が観月吟行会を東北で開催し、詩集を発行したことは嬉しいことで、各サークルが着実に発展している一例です。

三、新たに発足した漢詩鑑賞会A(講師玉井幸久理事)・鑑賞会B(講師住田笛雄監事)の活動も進行しております。

この中で運営委員の瀧川智志さんが「スマホ・デ・漢詩」という新企画を準備中です。全国の若者向けに漢詩を普及させる新しい方法として期待するとともに、県連として最大の支援をしてゆきたい。

四、神奈川新聞社は漢詩への理解があり、昨年からの第一日曜に漢詩欄を掲載してくれ、という昇格(今までは第五日曜のみ)となり、岡崎会長が執筆中です。

三溪園の吟行会には青木幸恵文化部長が参加されて記事となりました。

五、富士ゼロックス社のPR誌に岡崎会長の記事を依頼されたので「漢詩のすすめ」として、「バトル漢詩甲子園」の遊ぶ漢詩の紹介をし、共に学び遊ぶことに関して漢詩は有力な手段であることをPRしました。

六、人事運営体制(二十六年度)

理事 横山真吾(新任)

磯野衛孝(退任)

顧問 城田六郎(執行役理事より)

執行役理事

飯島敏雄・川上修己・高津有二

中島龍一・三村公二・室橋幸子

吉岡昭夫(以上七名新任)

運営委員

池上一利・磯邊邦雄・喜多 基

瀧川智志(以上四名新任)

この他は留任とします
 事務局長 十月より桜庭慎吾から
 三村公二に交替の予定
 七、懇親会

場所をポートヒルホテルに移して、室橋さんの司会により詩吟などの余興を交えて会員相互の懇親を深めました。

この際、岡崎会長から神奈川清韻の詩と文章に対する個人的自選の特別賞が五名の参加者に渡されました。

石川・窪寺両先生より即興で賀詩を頂きました。

石川岳堂先生

初夏丘頭九開會
 金河様式愈隆隆
 芙蓉白雪猩猩血
 能與薔薇爭雅風

窪寺貫道先生

蕭蕭細雨鎖花園
 蹇蹇何關短杖煩
 含露薔薇却妍麗
 無蜂蝶戲促吟魂



神奈川県漢詩連盟会計 25年度決算および26年度予算

収 入		支 出			
費 目	25決算	26予算	費 目	25決算	26予算
会員年会費	391,000	340,000	事務費	320,552	277,600
懇親会会費	280,000	250,000	懇親会費	226,000	250,000
研修会参加費	46,000	50,000	各行事費	581,414	626,500
吟行会参加費	152,000	160,000	講師謝礼	80,000	60,000
サークル交流会	311,000	300,000	協賛金等	20,000	20,000
寄付金等	31,040	0	会費等振込料金	27,722	30,000
詩集頒布代	112,500	0	詩集発行費	0	196,000
佩文齋詠物詩選	0	100,000	佩文齋詠物詩選	0	100,000
その他	60,000	0	臨時費・その他	45,600	30,000
合計	1,383,540	1,200,000	合計	1,301,288	1,590,100

年度末(ゆうちょ銀行振替口座)残高 25年度末:524,479円 26年度末(見込):134,379

■ 訃 報 小館裕彦氏(逝去)

神奈川県漢詩連盟の会員、小館裕彦氏は、二月二十八日 逝去されました。(享年七十八)。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

蔵書ご寄贈のお願い!

先に会員の大本久さんから漢詩関連の蔵書、約二〇〇冊余のご寄贈を受け(二〇一二年)、会員の方々に廉価で頒布した所、非常に好評で、皆様方からもう一度このような企画をしてほしいという声があがっております。

今回は会員の皆様方(特にベテランの会員の皆様)のお宅に眠っている漢詩関連の蔵書をご寄贈いただき、それを左記要領で一般会員の方々に廉価でお分けし、役立てていただこうと考えております。

一、先ずご寄贈頂く本のリストだけを十月末までに左記宛へご連絡ください。

(書名/著者名/発行所名)
 〒215-0017

川崎市麻生区王禅寺西2-19-3

FAX 044-96514950

MAIL mimu114@yahoo.co.jp

三村 公二(幹事)宛

二、寄贈蔵書の送付先、送付時期等については、リストを提供いただいた方々に別途ご連絡申し上げます。

三、頒布は左記要領で実施する予定です。

・会報1月号に頒布の詳細記事掲載
 同時に、寄贈頂いた本の全リストを会員宛に送付する。

・3月初に予定のサークル交流会(バトル甲子園)会場でその開始前に頒布する。

【連盟の諸活動報告】

さまざまに催して活性化中



春の研修会

城田 六郎

平成二十六年度春の研修会は、三グループに分けて実施し、詩稿提出者五十名、出席者四十四名の参加であった。特に石川雅則さんは何年ぶりかの出席で、大歓迎です。各サークルに所属していない会員の方は、是非研修会に出席されて旧交を温めていただきたい。

三グループに分けたことにより、時間的な余裕が生まれ全員の詩稿について十分な議論をし、研修の成果を挙げ得たものと考えております。例によって今回も各グループ上位入賞者のみならず、ラッキーセブン賞、無冠の帝王賞等、岡崎会長より奨励のための賞品が授与されました。

各グループの一位作品と感想は次の通り。

Aグループ

信州春

齊藤 護

残雪晶晶遠嶽皚 残雪晶々として遠岳皚たり
清流滾滾近郊回 清流滾々近郊に回る
君知此地遅春景 君知るや此の地春景の遅きを
百木一齊繚亂開 百木一齊繚乱と開く

この詩は、JR茅野駅から近い原村あたりから八ヶ岳を見たときのものです。五月上旬の信州は、桜、桃、辛夷などが同時に咲き出し、自分はいつも「信州の春は爆発だ」と言っております。この句を作るときは、前対格を意識して作りました。残雪と清流、晶晶と滾滾、遠と近ですが、最後の下三字がどうしても対句仕立てには出来ませんでした。

題の「信州春」は、杜牧の「江南春」から取ったのですが、会場で三字では坐りが悪いとの指摘で、成る程漢詩とはそんなものかと感心致しました。

Bグループ

薰風自南至

大谷 明史

巷衢紫燕宅邊飛 巷衢の紫燕宅辺に飛び
林藪黄鶯樹下歸 林藪の黄鶯樹下に帰る
老耄猶憐好風景 老耄猶憐れむ好風景
逍遙一刻對斜暉 逍遙一刻斜暉に對す

題は白居易の詩中より採ったが、(出典に関りなく)「南至」が冬至を意味することには思い至らなかつた。承句「樹下」は「樹上」が適切と御教示を受けた。席上、転句「憐」字に御質問

を受けたが、此処では「めぐる」の意で用いている。「好風景」は杜甫の「正是江南好風景」から借りたが、もつと具体的な語句が宜しいと承った。起承句の仕立ても、場所を示す字句が些か過剰で、未だ洗練を欠くことは自覚している。また各位の作品を興深く拝聴し、多々学ばせて戴き誠に豊かな午後であった。

Cグループ

櫻山晚鐘

秋吉 邦雄

攀登險徑正迢迢 險徑を攀登すれば正に迢々
滿目紅雲不可描 満目の紅雲描く可からず
幽賞忘歸蒼靄裏 幽賞歸るを忘る蒼靄の裏
晚鐘殷殷告春宵 晚鐘殷々春宵を告ぐ

桜の季節になると、その昔吉野山で桜狩をしたことを思い出す。急坂を登りきって見渡した一目千本の桜の壮観は今なお忘れられない。終日花を眺め、入相の鐘の音に驚いて帰途に就いたことである。そんな日のことを思い出しながら作詩した。

思いがけず高得票を頂くこととなった。とはいえ、諸先生や詩友から「痛い」が「貴重」なご意見を頂いた。

漢詩作りは難しいが奥が深い。わが残年を考えると、この先どこまで迎えられるやら…などと思ふこともある。しかし、岡崎会長が先ごろ書かれた「漢詩のすすめ」の記事を拝読し活を入れられた。

曰く「高齢者は孤立しやすい。この先は『独り学び・独り遊び』から『共学び・共遊び』の場に飛び込んで、アマチュア漢詩人として詩的なホモ・ルーデンス(遊ぶ人)へと自分を変身させることが大事だ」と。何歳になっても、この気概をもって研鑽を続けるべきかもしれない。梁塵秘抄も曾て歌った、「遊びをせむとや生まれけり」と。

**東京・神奈川漢詩連盟交流吟行会
横浜三溪園を散策**

高津 有二



東京・神奈川両漢詩連盟の第二回交流会は、二月二十二日、横浜三溪園で吟行会を兼ねて開催された。当日は、石川岳堂先生ご夫妻、東京都漢詩連盟窪寺会長を

はじめ、東京から十一名、神奈川から十九名に加えて今回は神奈川新聞青木文芸部長の特別参加で総勢三十一名が参加した。

三溪園では、原三溪とその創設による三溪園の顕彰に長年情熱を傾けて来られた、元三

溪園副園長の川幡留司氏のガイドにより、日陰に雪の残り、随所に紅白の梅の綻ぶ庭園と普段は入ることのできない建物の内部まで懇切丁寧に案内して頂いた。

参加者一同、往時を偲ぶ貴重な遺品の数々を目の当たりにして、至福の時間を共有することが出来た。

その後、三溪園に隣接する隣花苑で懇親会が開催された。石川先生の「神奈川・横浜の漢詩、原三溪の漢詩」の講話の後、恒例の全員の柏梁体の披露があり、石川先生の講評では何時もの悲喜交々、和氣藹藹の和やかな時間を過ごし、有意義な交流会であった。

また、石川、窪寺両先生の即興の詩のご披露があった。

三溪園遊覽偶成 岳堂 石川忠久

塵外尋名勝
雪餘欣好天
賞梅入庵裡
仰塔立池邊
蒐得騷人粹
推量舊主賢
迎客老園宰
娓娓語當年

遊三溪園 貫道 窪寺啓

春風尙冷度名園
拾句求詩步雪痕
池水敗荷莖櫛比
說來東道雅人軒

柏梁体

名園交歡武相民	風光十里及芳辰	雪後溪園橫濱津	雅苑和人料峭晨	日暄梅花笑迎賓	梅花園裡塵外身	探梅一路野遊人	早春庭園梅清純	早梅名苑興話巡	紅梅樹下鷺盟親	春光白雪紅梅脣	早梅枝上淺淺春	白梅白雲遊同倫	寒梅光映臥龍鱗	古邸巡室想人輪	三溪園裡詩景新	水禽浮處波翻銀	促詩幽徑郁香臻	聽蓮開花是正珍	懇說老翁垂八旬	懇篤說歷明經綸	豪邸不羨甘清貧	割財尙文興國眞	三溪遺得蚕糸巾	瀟洒葺屋好蔬陳	清遊佳苑雅化淳	江都濱盟奎運伸	敲句鷗盟詩有神	園亭詩友接如醇	共樂詩筵名園鄰
吉岡 昭夫	三上 光敏	川上 修己	秋吉 邦雄	石川 晏子	吉池 啓子	上田 尤子	宇津井 寛	古田 光子	菅井 和子	瀧川 智志	二戸 邦子	住田 笛雄	岡崎 滿義	青木 幸恵	淺岡 青洲	水城まゆみ	窪寺 貫道	中島 龍一	桜庭 慎吾	住田 久子	高津 有二	河野 光世	更田 金蔵	横溝喜久男	池上 一利	室橋 幸子	山田 治	飯島 敏雄	石川 忠久

恒例

第4回サークル交流会

会場に熱気が溢れ、

バトル漢詩甲子園盛會裏に終了!

三村公二

第四回サークル交流会は三月七日、昨年に引き続き「バトル漢詩甲子園」を開催した。昨年実施後のアンケートでは総じて好評であったものの、問題点もいくつか指摘され、実行委員会でこれをクリアすべく検討を重ねて本年の開催にもつていった。

各サークルでは代表詩稿の選考に十分な議論を重ね、代表バトルは他サークルの作品の事前勉強も怠りなくバトルに臨んだため、バトルに熱気が溢れ、あつという間の八〇分間であった。今年度の「バトル漢詩甲子園」の概要と特徴点は次の通りである。

★今年度は七期生を新たに加えて八グループとなり、一つの詩稿についての議論を深めるため、各サークル一首(昨年は二首)として対象詩稿数を絞りこんだ。今回も窪寺先生を対象作品について懇切なる批評、添削、講評のご指導を頂いた。本年の優秀作品は次の通りであった。

最優秀作品 以文会 秋吉邦雄

詩題「白菊」

優秀作品 三水会 大森正泰

詩題「陽春野色」

優秀作品 七步会 山岡健郎

詩題「訪阿藤伯海記念館」

★バトル会場も神奈川近代文学館大ホールに変更して、スクリーンも大きく、文字も大きく見やすいものに工夫して会場からのバトル参加をしやすいものにした。

★昨年の詩吟に加えて、本年は揮毫作品の展示も行った。自詠自吟、自詠自書が究極の目標であるが、三名の方の自詠自書の作品が展示された。吟詠は最優秀作品のみバトル会場で行い、他は懇親会場で実施した。また、揮毫作品は全て懇親会場に展示した。八サークルの代表作品に加えて、石川先生、窪寺先生、岡崎会長、櫻庭事務局長、住田監事にも特別出展を頂いた。

★今年度のバトルは次の各氏であった。

金星会 佐々木正人

三水会 岡崎 勝郎

好文会 菅野 省三

詩游会 池上 一利

五友会 小林 幹雄

以文会 杉森千枝美

七步会 北村 友雄

岳精会漢詩研究会 前島 彩江

★懇親会では詩吟をはじめ、楽しいスピーチも飛び出し、サークル間の交流を尚一層深めることが出来た。窪寺先生から懇親会場で次の即興詩を頂いた。

神奈川縣漢詩連盟第二回詩合後懇親會
席上即詠
窪寺貫道

金港丘頭春氣清
碧波俯瞰巨船橫
鷗盟探韻年長短
佳宴忘來巧拙爭

全日本漢詩連盟平成二十六年四月
扶桑風韻

入賞者おめでとうございます

秀作

東郊遊歩 川上修己

春林綠動萬枝鮮 春林綠動し 万枝鮮やかなり

雨霽光風度陌阡 雨霽れ 光風陌阡を渡る

三尺龍孫昨三寸 三尺の龍孫 昨は三寸

槍鋒暢達刺蒼天 槍鋒暢達し蒼天を刺す

聖誕節前夜旗店 中島龍一

待君窓下獨傾杯 君を待つ窓下 独り杯を傾く

坐久時疑或不來 坐して久し 時に疑う 或は来らずか

細雨絲絲天欲雪 細雨 糸々として天 雪ふらんと欲す

徒聞街巷聖歌回 徒らに聞く街巷に聖歌回るを

雨天懷想魏崙 大谷明史

寂寂陰霖愁叵排 寂々たる陰霖に 愁排しがた回く

紫髯騷客獨傷懷 紫髯の騷客 独り傷懷

胸中涕泗似秋雨 胸中の涕泗 秋雨の似し

眼下蕭条巴里街 眼下蕭条たり 巴里の街

佳作

過城島憶白秋

水城まゆみ

魚莊蟹舍雨霏霏

魚莊蟹舍 雨霏々たり

漂泊騷人沾客衣

漂泊の騷人 客衣を沾す

不遇翻催賦詩巧

不遇翻つて催す 賦詩の巧なるを

權歌起處夕陽微

權歌起こる処 夕陽微かなり

蜀山早行

小嶋明紀子

五更征鐸遠峰微

五更の征鐸 遠峰微かなり

細雨蕭蕭逼客衣

細雨蕭々として客衣に逼る

石磴冷泉時一啜

石磴 冷泉 時に一啜す

蜀山破寺數僧歸

蜀山の破寺 數僧歸る

梅雨閉關

本宮陽子

梅天未霽漏聲微

梅天未だ霽れず漏声微なり

寂寂茅庵人到稀

寂々たる茅庵人の到ること稀なり

獨坐窓前閑啜茗

窓前に独坐し閑かに茗を啜る

入選

豪雨

城田六郎

恰似漏天京洛濛

恰も漏天に似て京洛濛く

百年無有老人忡

百年に有ること無しと老人忡う

一朝桂水川塗亂

一朝桂水川塗乱れ

渡月橋邊黃濁中

渡月橋邊 黃濁の中

秋日偶成

久川憲四郎

雨洗炎威涼意盈

雨は炎威を洗い涼意盈つ

籬邊唧唧聽蛩聲

籬邊唧々として蛩声を聴く

園亭獨坐黃昏裏

園亭独坐す黃昏の裏

一片秋懷詩未成

一片の秋懷 詩未だ成らず

神漢連のホームページの現状と将来 川上修己

神奈川県漢詩連盟のホームページが開設されて二年余りとなります。この間に四〇〇〇件を超える閲覧があり、県内のみならず全国の多くの方々から注目されているようです。このHP(ホームページ)の新鮮さを保つために様々な工夫を凝らしております。

先ず、トップページにおいて、毎月玉井理事の漢詩鑑賞の詩を更新するとともに、この詩に相応しい素晴らしい水墨画を田原副会長に描いて頂いております。更にこの詩を室橋幸子さんの中国語朗読で動画と共にピンイン(中国語の発音記号)付きで掲載しております。さらに神漢連の最新情報をトピックス欄にその都度動画、静止画などを含めて発信しています。「会員の作品」、「エッセイ漢詩と私」のページも随時更新しており、HPが陳腐に陥らないような工夫をしております。過去の情報も削除することなく掲載しておりますのでご覧ください。また広報紙「漢詩神奈川」も第一号から最新号までHP内に載せています。今後の課題としては、会員の方から「会員の方々の声」とか「漢詩にまつわる身近な情報・話題」などを寄せて頂き、漢詩が日常生活にマッチできるようなHPになればと考えております。これには偏に会員の皆様からの情報が必要かと思ひます。皆様のご協力をお願いする次第で

石川忠久先生の詩碑建立さる

中島龍一

真鶴半島お林展望公園に三月三十日、石川忠久先生の詩碑が完成し除幕式とそれに続く入魂式が行われた。全日本漢詩連盟の創立十周年事業の一環で詩碑建立発起人会(窪寺啓代表)により営まれ、真鶴町から牧岡教育長他関係者二十数名が出席して完成を祝った。

詩は真鶴岬からの景観を七言律詩にしたもので先生の自筆。横に小さな字で読み下し文が付され、重量約六トンの小松石である。次回の吟行会にこの地を訪れる予定です。

眞鶴海岸書懷

背指靈峯向海濤 靈峰を背指して海濤に向かえば

洪波縹渺舞遊禽 洪波縹渺として遊禽舞う

一條航跡青螺泛 一条の航跡青螺泛び

萬里雲間白日沈 万里の雲間白日沈む

曠士高懷空眼界 曠士の高懷眼界空し

騷人雅興滿胸襟 騷人の雅興胸襟に満つ

巖頭佇立馳遙思 巖頭佇立して遙思を馳すれば

何羨棲遲丘壑心 何ぞ羨まん棲遲丘壑の心

二十六年度吟行会の案内

今年度の吟行会は十月三十日(木)、右記の石川先生の新詩碑前にて、東京都連と合同で開催します。詳細は同封の案内を御覧の上、奮ってご参加下さい。

なお、参加申込は同封の振込用紙にて九月三十日(火)までをお願い致します。

神奈川清韻第二集の刊行を終えて

城田六郎

刊行が予定より若干遅れましたが、編集の大役を何とか果たすことができてホッとしている今日この頃です。一冊の本を世に送り出すにつけては、いかに多くの人の協力が必要であるか痛感した次第です。

第一集の八十八首に対し第二集の百三首は単純に差引して十五首の増加に過ぎませんが、出稿者の顔ぶれにはかなりの変化がみられます。第一集の出稿者のうち第二集にも出稿された方は六十三名、残りの四十名は新顔です。つまり神漢連の会員層が厚くなっている証左であり、今後の活動の原動力になるものと期待しております。

さし絵は田原副会長が引き受けてくださり、野菜の柔らかさと愛らしい絵が漢詩を引き立ててくれました。

初心者講座

八期生まもなく誕生

中島龍一

四月より開講した初心者漢詩入門講座は順調に進行中です。生徒数は三四名と多数で教室がつねに満員の状況でした。一人の脱落者もなく、六回目の講習会で卒業発表会も無事に終えることができ、今は七月末の八期生の会の発足を準備中です。

これから生徒の自主的な打合せにより世話人が決まり、八期生のサークル活動が年内に発足することになります。大いに期待しましょう。

「スマホ・デ・漢詩」

瀧川智志

漢詩は絶滅危惧種であるという説があるようです。漢詩愛好者の一人として大変残念です。しかし、漢詩には漢詩の面白さがあり、この面白さを将来のある若者に適切に伝達できれば絶滅危惧種から脱出できるのではないのでしょうか。新聞に「最近の大学生の40%は本を読まない。」という記事がありました。終日スマートフォンを覗いてメールとゲームに夢中とのことです。今や、各種情報はスマホを外しては若者に届かなくなっているようです。

現在、漢詩に関する情報は紙が主体になっています。パソコンに若干の情報はありますが、その情報もスマホで見ると画面が小さく見難く

快適とは言えません。現状では若者に漢詩情報は届いていないでしょう。やはりスマホにはスマホに適した表現が必要です。また、コンテンツも若者の感性に訴えるものであることが望まれます。古典的名作に加え、現代の世相に合った作品や作詩法の紹介も必要でしょう。

漢詩は、韻、平仄があるためゲーム的です。この面を活かして漢詩情報を提供するのにも一策ではないでしょうか。古くはラテン語の詩に自動作詩機が存在しました。俳句ゲームも既にインターネット上にあります。スマホで手軽にできる漢詩ゲーム、例えば、一詩の中の二語、あるいは三語の詩語を空白にし、用意された詩語の中から正解三択で選ぶなどいかがでしょうか。全唐詩、佩文韻府等をデータベースとする本格的漢詩自動生成システムが実現すれば、ゲームの域を超えて、作詩初心者に対抗できる作品も楽しみながら出来るようになるかもしれません。

さて、スマホで漢詩情報に接した現代の多忙な若者の反応はいかがでしょうか。一瞥で通り過ぎることでしょうか。若者向け「スマホ・デ・漢詩」はあたかも大海に餌を撒くような行為です。即効は期待できません。ただその一瞥が心の深層に残り、遠い将来、漢詩の世界に入るきっかけとなり漢詩繁栄に役立ってくれるのではないのでしょうか。

この大きな難題に時間をかけて皆で取り組んでゆき、漢詩の復興を図ってゆきたいと思っています。

【平成26年神奈川漢詩連盟総会講演】講演録 近代文人の漢詩 石川忠久

今日お話しするのは、まず皆さんよくご存じの漱石、子規。この二人は生まれが同じ年。慶応三年生まれ。その子規、漱石が頭で、その次に明治十二年生まれの永井荷風、ですから十歳ちよつと違う。さらに明治二十五年生まれの芥川龍之介、漱石先生の弟子ですが、漱石先生から見るとちよつと二十五歳違う。そして最後は一番若い中島敦、これが明治四十二年、つまり二十世紀になってからの一九〇九年生まれ。一八六七年、つまり慶応三年に生まれたこの二人、子規と漱石、そして明治十二年というと一八七九年に生まれた荷風、それから二十五歳若い芥川、中島敦と、こういうふうに並んでいたわけです。ですから、この人物の生まれ年を頭に入れておかないと具合が悪い。

ちよつと明治が四十五年ありますけれども、日清戦争から日露戦争というこの十年間、明治三十年代という時代にぐつと国力が上がったんですね。そして国民の意識も変わってきたわけです。ここで大きな転換があったわけですね。つまりそこまでは江戸以来の漢詩がずっと流れてきて、そしてむしろ明治になってからは盛んになったんですね。なぜ盛んになったかというのと、一つはコミュニケーションです。そういう媒体が整備されたでしょう。新聞ができた。新聞によって全国的に情報が発信できる。そし

て新聞には漢詩欄ができたわけです。漢詩欄が非常に重要な人気の番組というか。それで雲のように漢詩人口がふえて、うまい人もふえてきたわけです。ですから江戸時代で漢詩が終わりだと思つたら大間違いなんです。江戸時代の流れは、むしろ明治になって盛んになった。そのピークが日清戦争から日露戦争の十年間ということになります。

最近、これは岡崎さんが編集された全日本漢詩連盟会報の一番最後のページにある、いわゆる最近の日本のインテリの代表のような人が三人で座談している記事をここでちよつと紹介したい。皆さん、お読みになったかな。あの中、ある女性が漢詩はもう終わったと、明治以後、漢詩は終わったと言っている。忘れ去られたと、こつと言っているが、認識不足も甚だしいと思うね。それからぐつと変わりましたよ。しかし、こういう流れがぐつとあつて、そして今日に及んでいるということはやっぱり知っておかなければいけない。今ここで私も拝聴していただきました、この神奈川の動きを見たら終わったなんてとんでもない話だ。これから起こると思つている。是非その人をここに呼んで(笑)。しかし、そう思われてもしかたがないようなところも多少あるので、我々は、ぜひこの勢いをどんどん盛んにしてあつと言わせたいと思いますな。

今日は何気なくこの題を選びましたけれども、いい題を選んだなと自分でも思っている。というのは、これは盲点になっていると思う。あまり考えないでしょう。しかし、このあたりをよく考えておかないと今日の流れがわからないということになります。話したいことは山ほどありますけれども、今日はこの五人を材料にしてお話ししたいと思います。

夏目漱石はちよつと明治が始まる直前、慶応三年に生まれたわけでしょう。明治になって新しい学校制度ができた、その学校制度にのつているわけです。明治五年から小学校ができて、すからね。そして小学校ができて中学ができて、高等学校ができたのはちよつと後ですけど、大が明治十年にできたでしょう。明治十年に大ができたときには漱石はまだ十歳ぐらいです。明治の前には文久という年号があるんですが、文久生まれの人と、そして今言つた慶応生まれの人とはそれほど年が違わない。年は違わないんだけど、ぐつと違う。文久の人は明治になっての学校制度の整備期に遭遇した人達です。整備期に遭遇したからものすごい飛び級をしている。例えば森鷗外がそうですね。森鷗外は十八歳だか十九歳で東大の医学部を出ているんです。そして嘉納治五郎もそうです。嘉納治五郎は文久三年生まれだと思つたら、これもとにかく明治十五、十六年のときに、まだ二十にならないで東大を出ています。横山大観とかああいう人たちの師匠だった人、岡倉天心もそうですよ。あれも文久生まれです。それで

十七歳か十八歳でもって大学を出ている。

非常におもしろいのは、幾らも違わないんだけど、そこに大きな差があつて、そして漱石ぐらいからは明治の完備した、だんだんと完備していく学校制度によって明治二十六年に大学を卒業しています。そうすると満で二十六歳になつているわけ。我々よりも遅いな。今だったら二十二歳で大体卒業しますけど、漱石は二十六歳で卒業している。何しろ予備門というのがあつたでしょう。大学三年の前に予備門が五年あつたんです。高等学校に当たるものが五年もあつた。彼は二丁寧にも一年落第したから六年やつているんですね。六年やつて大学に入つて、そういうふうじつくりやつたんですね。彼は結局数えの五十歳で死んじゃいますから随分長いこと教育に投資して、活躍できるときは少なかったけど、逆に、じつくりやつたから花が咲いたのね。おもしろいことで、こういうことをやっぱり頭に入れとかないといかん。

今日、最初に取り上げた正岡子規と夏目漱石が大人になりかけの時、嘉永、安政生まれの人達、国分青崖、本田種竹、森槐南が少壮詩人として出てくる。わーっと出てくる。一番典型的な例が国分青崖であります。国分青崖という詩人は戦争中まで生きていた。昭和十七、十八年まで、八十八歳ぐらいまで生きた。この人がさつそうとして出てきたのが明治の三十年前後。この人は安政生まれです。国分青崖だけではなくて森春濤の息子の森槐南、それから本田種竹、こういうったような、いわゆる三大

詩人と言われる少壮詩人が大体このころの生まれなんです。その大きなうねりができてくる。その時に、今日ご紹介する人達ほどのぐらゐの年齢差があるかという、大体十歳違うんです。漱石と子規は明治三十年に三十歳、明治三十五年に三十五歳です。三十五歳で子規は病気で死にますけど。

さて、正岡子規と漱石は同年同級であります。が、生まれた環境は随分違う。正岡子規は四国の松山藩の藩儒の孫です。そして藩儒のおじいさんがまだ生きているところにその薫陶を受けている。したがって、いわゆる昔風の、江戸時代風の武士の教養を身につけている。ただし、八歳か九歳のときにおじいさんが死にますから長いことではなかったけど、しかし、これは大きいです。非常に大きい。だから彼は愛媛県の中学に入ったときには、もう、日本のリーダー“として漢詩を作つたりなんかしていけば、その土地では有名人だったらいい。それで明治十六年におじいさんが東京に出てきて活躍しておりました関係で東京へ出ていく。それで予備校へ入つて翌年、明治十七年に大学予備門に合格いたします。明治十七年に合格したときに漱石も一緒に入つていた。しかし、お互いよく知らない。というのは、今の学校制度もそうですけど、東京もんというの、固まるんです。東京もんが固まっていると、よそのものはあんまり入れないのね。ですから、正岡子規が夏目漱石と親しくなつたのは、何と入学後五年たつている。同級生でありながら。しかもおもしろ

いのは子規は一年生を二度やつたんです。落第。漱石は二年生を二度やつたんです。だから全く一緒になつたのね。これが絶妙だな。天の神様はちゃんと仕組んでいたのね。「おまえたちは同級生でなければだめだよ」ということだったんだと思う。漱石は二年生のときに落第している。漱石はそれから心を取り直して、ずっと後は首席で通したといえますけど。この二人が同年であり、また生まれ月が実は漱石の方は正月生まれなんです。子規は九月生まれで子規のほうが弟分なんだけれども、実際には反対、子規のほうが兄貴分、漱石が弟分。それは今言ったように彼らが生まれ育つた環境と大きく関係がある。やっぱり一目置いていたんですね。相手は藩儒の家に育つていて、相当漢詩なんかもやる。しかも入学早々にそういうような詩を作つたりなんかして見せあつたりなんかするようになることが昔はあつたんですね。漱石のほうはいろんなせんさくはあるけど、牛込、高田馬場あたりの名主ぐらゐの家だということ。で士族ではないみたいですが。でも、兄貴も東大に行つていくくらいですから相当の資産のある名主とか、そういうような家に生まれているわけで、明治の初年から言えば相当高い位置的な環境だと思います。しかし、正岡子規のような藩儒の孫というふうなそういうのとちよつと違う。だから、お互いに同級生だから相手を見るわけね。あいつのほうが一枚上手だと、こういうふうなことでだんだんわかってくるんですが、彼らが知り合つて何年かたつて芝居か

何かのことで意気投合するようになってから、子規が『七草集』といって漢文とか漢詩とか、そういった七種の文集をつくって漱石に見せたんですね。「どうだ、かなりうまいだろう」と思って見せたらしい。しかし、漱石は「うん」と思って、それで房総半島の旅行のときに房総半島の漢文の日記を作ったでしょう、あれを作って、それは実は子規に見せるためだった。子規に見せたところが子規はびっくりしたわけね。そこで本当の相手のあれを見て、いわゆる心の友達になつたらしい。

ですから入学後相当たっていたんですけど、彼らが本当に知り合ったのは、明治二十二年頃に知り合つて親友になつたわけです。一目お互いに置いたわけで、子規は漱石のことを畏友と言っている。畏れる友達、畏友と言っている。正岡子規は哲学科に入った後、国文科に転科して国文科を結局、中途退学してしまいましたから、彼は大学を卒業していない。漱石の方は英文科に行きまして、トップで卒業したと言いたいけど、実は一人しかいないんですからトップに決まっているんだけど(笑)。それでお互いの道を歩むわけでありませう。

「夏目漱石の伊予に之くを送る」という作品がありますが、これが坊ちゃんという小説の種類になつた松山の中学校に漱石が赴任する。その松山は奇しくも正岡子規本人の生まれ故郷ですから、その正岡子規の生まれ故郷である松山の中学、当時は県に中学は一つしかないですけど、その中学。さあ、行けや、三千里の向こ

うの松山までと。こういうかにも兄貴ぶつていて、やはり正岡子規の方が兄貴ぶるたちがある。「君を送れば暮寒生ず」ちよど冬の頃だ。「空中に大岳懸かり」これは富士山のこと。「海末に長瀾起こらん」蒸気船で行きますから波が立つ。自分の故郷だからちよどと謙遜したのかな、僻地なんて言っている。「僻地 交遊少く 狡児 教化難からん」自分が出た中学ですけど、そこに親友の漱石が先生になつて行くので、謙遜した気分でやんちゃな子供たちがなかなか教えるの難しいぞと。「清明 再会を期す 後るる莫れ 晩花の残るるに」清明の頃にもう一回会おうねと。「晩花の残るるに」というのは、つまり清明というのは春で言えば少し時がたつておりますから、その晩花が崩れる。それにおくれないいけないよ、春になつて早く帰つておいでと、こう言っている。この歌いぶりなんかの中にも子規がちよどと兄貴ぶつていようなところが見られるわけでありませう。

送夏目漱石之伊予 正岡子規

夏目漱石の伊予に之くを送る

去矣三千里 去けや三千里

送君生暮寒 君を送れば暮寒生ず

空中懸大嶽 空中に大岳懸かり

海末起長瀾 海末に長瀾起こらん

僻地交遊少 僻地 交遊少く

狡兒教化難 狡児 教化難からん

清明期再會 清明 再会を期す

莫後晩花殘 後るる莫れ晩花の残るるに

問題は、この作品の出来映えであります。これは皆様よくご存じのとおり、五言律詩ですね。五言律詩はなかなか難しいんですけど、「空中に大岳懸かり 海末に長瀾起こらん」これは対句になっている。「空中」に対して「海末」、「大きな山」に対して「長い波」と非常に格調正しく道中の様子を二句でもつてとらえている。「僻地 交遊少く 狡児 教化難からん」これも行く先の伊予の中学校のことを言っている。これもなかなかおもしろいというわけで、相当の腕前だということがわかるんです。彼らよりは十歳ぐらい年上の連中が詩壇を牛耳つておりまして、それで結局、正岡子規は漢詩をやめてしまふんです。

その隣にあります「金州城外」。明治二十八年に戦争が終わるわけですね。日清戦争。日清戦争は明治二十七年、二十八年。二十八年の三月の末ごろにはもう戦争は終わっていたんですけど、彼は従軍記者を希望いたしましたので、その許可がおりた時には実は戦争が終わったんですね。戦争は終わったけれども、彼は行ったんです。行って、それだけのことはあったな、森鷗外なんかにも向こうで会つたりなんかしています。そして「金州城外」という詩を作った。これがおもしろいのは、乃木將軍の「金州城外」のちよど十年前に作っているわけです。逆に言うと、乃木將軍は正岡子規の「金州城外」を知っていたかもしれない。あの將軍の最高傑作と言われている「金州城外立斜陽」とい

う、よく詩吟にもするでしょう、あれのちよ
ど十年前に同じ題で作っているんです。題が同
じということも今のような想像をさせるあれ
だと思えますね。これは余談でありますけど。

金洲城外 金洲城外 正岡子規

亂後亡民不可求 乱後の亡民求むべからず

杏花空屋燕兒愁 杏花空屋燕兒愁う

遼陽四月草猶短 遼陽四月草猶お短し

不爲行人掩髑髏 行人の為に髑髏を掩わず

さて、どんなことを言っているか。「最初の
二句を見ますと、戦争の後、民は逃げた。逃げ
た民はどこへ行ったかわからん。ただ、がらん
とした家。そこに杏が咲いている。燕もちゃん
とやってくる。そういうような情景を描いてい
る。「遼陽四月草猶お短し」金洲は遼陽でありま
すが、この四月と言っているのは、どうも今の
暦のようですね。新暦のようですね。四月は旧
暦ではもう夏ですね。四・五・六は夏ですから、
これは本当は三月だと思うんだが、ちょうど今
言いました今の暦の三月の末に行つて、そして
四月になつて作つたと思う。「遼陽四月草猶お
短し」行人の為に髑髏を掩わず」。この句は唐
詩のまねをしているわけですね。戦争の後、髑
髏がごろごろ転がっている。そういう髑髏を草
でも覆ってくればよいのだが、まだ草が短
いので我々旅人の目に触れてしまう。「行人の
為に髑髏を掩わず」と。これはなかなか私が言
うのもあれですけど、いい詩だと思いますな。
こういう詩を作っていたわけでありすが

これがちょうど明治二十八年の四月。彼はこ
の帰りに船で咯血をして、結局その咯血が引
き金になつて彼はどんどん病気が進んでいく
わけで、ちょうどそのころに彼は漢詩をやめ
ます。正岡子規の漢詩は明治二十九年で終
わつていますね。それまでに相当の数の詩を
作つておりますが、さすがに江戸時代の学者
の家に生まれたらしく、相当の稽古を積んで
若い時の作品の中にもおもしろい作品があり
ます。しかし、子規の意識では少し先輩に当た
る三人の名前、こういう人たちが大変な仕事
をしておりますのでとてもこれはかなわんと
思つたんですね。というのは、彼がそれだけ
のことができたから逆にわかるんですね。

ところが、漱石はそうではないんですね。同
じ時代に育つたんでありますけど、漱石は子
供の時から漢詩をやつていたことではない。彼
が漢詩を勉強したのは二松學舎へ来てからで
す。彼は一中をやめて、当時は今の日比谷高校
に当たる学校が一つだけあつた。東京で中学
一つだけあつた、そこに入つたわけです。です
からエリートですね。しかし、エリートの中学
をやめて、それで漢学塾である二松學舎に來
た。二松學舎は明治十年にできましたから、彼
が入つたときはまだ三年か四年しかたつてい
ない。おんぼろ校舎だつたと後年、述懐してい
ますけど、そこでみっちり勉強したんですね、
一年。大体一年半ぐらい勉強している。そのと
きのカリキュラムが今、残っております。それ
は非常に基礎的な漢文を勉強し、そして又、漢

文を作つたり、漢詩を作つたりする科目も当
然あるわけで、一年半と言えは短いようであ
りますけど、しかし、整つたカリキュラムが
んがんとつたら相当な力がつきますよ。彼は
ここである程度の力を身につけて、そして大
学予備門に入つて、最初から英文科に行くとい
うことは大体兄貴の影響で決めていたらし
いですが、友達にはまだまだそういうような
人がいましたので、そこで子規とめぐり合つ
ている。子規とめぐり合うことによつて自分
の漢詩、漢文の眠つていたものが目覚めたん
ですね。「俺だつてこのぐらいのことはでき
よ」ということでもつて房総の日記を書いて
いる。房総の日記は今、我々の目から見ると文
章は冗長で相当手直ししないと一人前の文章
じゃないぐらいの程度ではありませんけれども、
若いころの書生としては、あのぐらいの書
くということは、ある程度のあれじゃないか
と思えますね。彼はそこから偉かつたのは相
手の方が上だと思つたんですね。そこで子規
とやりとりをしているうちに、だんだんと詩
の実力もついてきたんですね。きょうはここ
にご紹介しておりませんが、子規と相
当やりとりもして、しかし、明治三十三年に彼
は選ばれてイギリスに留学する。イギリスに
留学するときまでは結構作つていた。その前
に四年間、熊本の五高にいたでしょう。第五高
等学校、熊本、あそこに四年いた、丸四年。丸
四年というのは漱石の人生で随分長いです。
その丸四年の間そこにおいて、幸せだったこと

に、そこには長尾雨山がいたんですね。長尾雨山の名前はここに書いてないけど、早死にしたために、ちよつと影が薄かったけど、これも安政生まれですね。まだほかにもいましたけど、主として長尾雨山について詩の稽古をしている。漱石の偉いところは、同級生でも正岡子規の方が上だと思つたと正岡子規と一生懸命くついついて詩の稽古をする。そして熊本に行くと、年はそれほど違わないんだけど、相手はとにかく名のある漢詩人ですから辞を低くして長尾雨山に添削を頼んでいるわけですね。長尾雨山の方は自分より年が若いけれども、相手は帝国大学を出ていますから、やつぱり一目置いて遠慮がちに直しているが、その遠慮がちに直しているのが非常に的確に直しているんですね。これは今日、朱で直しているところは残っておりませんが、的確に直している。相手を褒めてもいる。やつぱり向こうは、だつて”給料”といつたつて向こうの方がうんと上ですからね。ですから遠慮もあつて遠慮がちに直しているけれども、やはり”専門詩人”ですから、ここでちゃんと直している。四年いきましたから、そこで彼はそのほかの漢文科の先生たちとも交わつて、この四年間に相当の力がついたと思う。

ところが、今言つた通り丸二年間イギリスに留学することになった。完全にこれは”横文字”とにかく文部省から派遣されるという立場ですから勉強しないわけにいかないわけでしょう。ロンドンに行つたら、それこそうなされるぐらいに横文字の世界に漬からされて。だから、一時「漱石、発狂したか」なんてニュースも流れたらしいのね。そして、ちよつと帰る年、明治三十五年の十一月ごろに帰るんですが、そのときには子規は死んでいます。子規は九月に死んだ。だから親友の子規の死期にも会えなかつたんだけど、彼は丸二年間の英国留学を終えて帰つてきた。そして、それから皆さんもご存じのとおり一高の教授をやつたり東大の講師をやつたりして、結局それをやめてしまふ。これは相当のことですよ。だつて官費でイギリスまで行つて二年間勉強させてもらったから、ちよつとやめにくいじゃないですか。それをやめてしまった。よっぽど合わなかつた。これは漱石の頭の中には、やはり明治政府に対する抵抗意識があつたと思う。彼は江戸の人ですから、いわゆる佐幕派というやつ。佐幕派の考え方。それで嫌なものは嫌だと言つてやめてしまったと思う。そして当時としてはステータスがあまり高くない新聞に入った。『朝日新聞』のお抱え文章家になつて、新聞のために小説を書くという。これは今で考えることと随分違ふと思う。その当時は大学は一つしかなかつた。まだ京都大学はできていない。たつた一つしかない大学の椅子が約束されている。にもかかわらず、それを弊履のごとく捨てて、しかも新聞に入つて小説を書くという、このことは大変なへそ曲がり。恐らく漱石のそういう行動、そして、その考え方の根底には佐幕派の考え方があると思ひますね。明治政府にしつぽを振ることを潔しとしないと、そういうところがあると思う。

後年、文学博士を断るのは、やはりその一つの”僭上”の行為だと思ふ。

結局、彼は明治四十三年まで、つまり明治三十三年に留学し、明治四十三年まで丸十年間、漢詩をやらないんです。一つも作つていません。ところが、明治四十三年に、これがまた天の配剤だな、大病するんです。生きるか死ぬかの大病をして、もともと胃弱で彼は修善寺でもつて死ぬか生きるかという病氣をして、まだ若かつたためもあつて治る。治るんですけども、そこで人生観が変わる。その人生観が変わつた時にこの詩が出てきたんです。これがそうですね。これは明治四十三年の九月に作つたものでありますが、病氣は七月にひどい吐血をして少し治つてきた。

無題 無題 夏目漱石

仰臥人如唾 仰臥して人唾の如く
默然見大空 默然として大空を見る
大空雲不動 大空雲動かず
終日杳相同 終日杳として相同じ

一見してこの作品の背後には李白の敬亭山の詩があることがわかりますね。李白が敬亭山を見て山と自分とが心通わす。あれも五言絶句です。五言絶句は一番短い。一番短い五言絶句がぶつと出てきた。これが彼の漢詩生活の復活です。生きるか死ぬかの病氣、そういう境目に来たからぶつと出たんですね。ぎゅーつと西のほうに引かれていたのがぴゅーつと返つたんです。丸十年間空白だったんですけど、ここか

らは勢いづいて、そして彼はちようどそのころに若い文人画家が弟子入りをしたりなんかして、そういう人たちと、いわゆる絵をかいで自分で詩をつくって、讚和“する。自画自讚ですね。自画自讚の楽しみを自分で見出し出して、そして大正五年に至るまで、また相当の数の詩をこしらえておられます。熊本に行つて修養したことが大きな根っこになった、肥やしになつていく。十年間はそれはずっと眠つていましたけど、修善寺の大患をきっかけにして、またそれが出て、しかもさつき言つたように文人家の世界が開けて、ずっと。おもしろいことは、大正五年の十二月九日に死ぬんですけど、その年の七月ごろから『明暗』という小説を書いている途中から毎日毎日詩をつくつたんですね。しかも七言律詩を作つた。七言律詩は一番難しいんですけど、その一番難しい七言律詩を彼は毎日毎日つくつている。彼の作品は今、一三〇首ぐらいしか残つておりませんが、その中でこの作品が、何首だつたかな、相当の数ですね。七十首ぐらいあるかな。作るのに難しい七言律詩をあえて選んで、そして『明暗』という小説を午前中に書いて、午後はその俗化した心を払うかのように七言律詩をこしらえた。ちようどそのころ大学を卒業して、当時は大学は七月卒業です。七月に卒業して、そして芥川と久米正雄が漱石に師事して、大学生の頃から漱石の家にも出入りしていたらしいが、いよいよ卒業したというところで、この若い二人は先生に対していろいろ教を請いにきていたりもしたんであり

ましよう。そこでこの二人が房総半島を、かつて漱石が旅行したことのある房総半島を旅行して、そのときに漱石がわざわざこの二人に手紙を与えているんですね。「僕はもう五十歳だ」と。その当時の五十歳というのは相当老人の意識で書いている。「君たちは若い」と言っている。いろいろなことを書いている。「午前中に小説を書いて俗了された心をば午後七言律詩を作つて晴らしています」と、こういうことを書いている。あの手紙は非常に有名な手紙なので、よく読まれていますけれども、おもしろいのは最後のこの詩です。これは最後の詩ですね。十一月の二十何日だつたかな。例によつて午前中に俗化された気持ちを午後この詩をつくつて晴らした。

無題 無題

夏目漱石

眞蹤寂寞杳難尋 眞蹤は寂寞として杳として尋ね難く
欲抱虚懷歩古今 虚懷を抱いて古今を歩まんと欲す
碧水碧山何有我 碧水 碧山 何ぞ我れ有らん
蓋天蓋地は無心 蓋天 蓋地 是れ無心
依稀暮色月離草 依稀たる暮色 月は草を離れ
錯落秋聲風在林 錯落たる秋声 風は林に在り
眼耳雙忘身亦失 眼耳双つながら忘れて身も亦た失い
空中獨唱白雲吟 空中に独り唱す 白雲の吟

「眞蹤は寂寞として杳として尋ね難く、虚懷を抱いて古今を歩まんと欲す」非常に抽象的な言い方してますけど、これを講釈していると三時間かかってしまうから省略しますけど、なかなか深い。人生五十、その五十歳になって自分の一生をずっと振り返っている、そうい

うような心の持ちようの中でこの詩ができたと思えます。最後に、眼も耳も二つとも忘れて身もまた失つてしまふ、空中に一人で白雲の歌を歌うんだと、こう言っている。これがまことに縁起の悪い言葉で、事実これで最後になつてしまった。こういうことあるんですね。詩の識です。詩識、詩の予言。「空中に独り唱す白雲の吟」縁起悪いじゃないですか。眼も耳もすべて忘れて空中でもって独りで白雲の歌を歌うんだと。白雲というのは別世界、人間世界ではない世界の象徴でありますから、あたかも辞世みたいな詩を作っているわけですね。その日夕方に食べたものが悪くて、それで結局、吐血して人事不省になつて意識が戻らなかつたということでもあります。彼の作詩人生はこれをもつて完結したわけですから、非常に完結の仕方が見事な完結の仕方。

そこで漱石の作品の全体を見てどういうことが言えるかというと、漱石は自分の作品は自信満々。生死の関頭に立つて復活して、そして十年間の西に引かれていたのが逆にばねになつて、そこでその世界をさらに東洋精神の世界にのめり込む一つのばねになつたわけですね。それで彼は社会的な位置も上がったでしょう。だからもみんな「先生、先生」と言われるような立場になつた。文学博士なんかとんでもないですね。「そんなもの要るもんか」と、こういうことになつたから、もう怖いものなしだな。だから、彼は自分の作品は相当自信があつたと思う。しかし、そこが問題なん

だけど、漱石はそうなんだけど、子規はそうではない。子規は三十歳になるころに「もう自分の作品はこの連中にならん。どうやったらだめだ」と、こう思ったからやめた。

ところが、そのころ漱石の方はそうではない。まだ勉強途中だった。しかも西の方に行くと全く隔絶した世界にいたから、そういう世界にどっぷりつかるとはなかったわけね。むしろ彼は日常生活の中でこういった人たちが活躍しているというのをもよく知っている。また、たくさんの漢詩の雑誌も出ていることもよく知っている。しかし、自分は違うと思っているのね。二人の若い芥川と久米に対しての手紙なんか見ると、もう立場は老大家ですよ。老大家が若い者に論しているわけですね。ですから、もう意識の上では相当な高い意識を持っている。自信満々。これが大きな違い。

正岡子規と夏目漱石と比較すると、正岡子規の方が漢詩に近い、漢詩に浸り込む家に育ちながら、逆にそれがマイナスになって、そしてよく見える。だから彼らが大人になって活躍する時には既に若手のそういうような国分青崖とか本田種竹が活躍してますから、これはとてもかなわんと思った。だから俳句の世界にのめり込むことになったわけ。漱石は逆にそうではないんですね。そのころはまだ修行中ですから随分違う。おもしろいことですね。

(文恵 三村 公二)

(後半は、次号に掲載いたします。尚、本文紙数の関係で途中若干カットいたしました)

会員便り



漢詩鑑賞会Aに参加して

香取 和之

漢詩鑑賞会Aは、唐詩を主体に古今の名詩を鑑賞する会として、本年一月から始まり、玉井幸久先生が講師として毎月第四木曜日に講義されている。会場はJR本郷台駅前の「あーすプラザ」である。

鑑賞会は、日本人に親しまれている孟浩然の「春暁」に始まって、彼の主な漢詩に遊び、今は李白の足跡を訪ねながら、白髮三千丈(秋浦歌)、朝辞白帝彩云間(早発白帝城)、牀前看月光(静夜思)と、先生の朗々たるお声が教室に響き渡っている。

先生の講義では、詩の解釈に留まらず、李白が故郷蜀の国を出てどのように一生を過ごしたかを地図でたどりながら、詩の背景や詩にまつわる故事を話される。例えば上記の白帝城の名の由来から五行説の解説へ、呉越を懐古した李白の詩の説明から臥薪嘗胆そして呉越の戦いの逸話へと、留まる所を知らない感すらする。正に、人生感意気(述懐)である。また李白の詩に関連する他の有名人の詩、さらには孟浩然など同世代の詩人との交際などを名調子で話される。

先生の熱意が伝わってきて、毎回の二時間

半の講義はあつという間に過ぎる。唐詩選などを自分一人で読んでいても、よく判らないことが多いが、このように講義していただく、楽しみながらじっくりと漢詩が味わえるものと感謝している。

本鑑賞会の特色としては、先生の名講義と共に、講義に該当する漢詩・地図などの資料が液晶プロジェクターでスクリーンに表示されて、全員が一堂に見られることである。さらには本鑑賞会のホームページでその講義録を閲覧し、録音された先生の講義を再度聴いて復習出来ることである。

このように素晴らしい鑑賞会で、毎回三十名以上の聴講者があるが、さらに多くの方々に参加をお勧めしたい。

漢詩鑑賞会B講座 輪読『唐詩選画本』 横溝 比呂美

今回の講座で取り上げたような唐詩選画本は、江戸時代に多く出版されたという。現在も唐詩本の挿絵として私たちを楽しませてくれている。この画本を使用している講座ということで、唐詩に疎い私が、画本なら…と興味を抱いたのはいうまでもない。『百聞は一見に如かず』門を叩くことにした。

ところがこれが面白い。ついて行けるだろうか? と心配したのは、取り越し苦労にすぎなかった。

(15頁下段に続く)

漢詩と私

芳雲 石川省吾

昭和十八年旧制中学に入って初めて漢文を

学んだ。時は太平洋戦争のさなか、戦局は既に急を告げ、翌年陸軍幼年学校に転じた。中学の同級生諸君は軍需工場に駆り出されて学業などおぼつかなくなる中、我幼年学校は軍律厳しき日夜ではあったが、午前は学業、午後は訓練と一流の教官によって指導を受け続けたのは有難いことであった。ところが奇異に感じたのは漢文教育。テキストはすべて片かな交じりの書き下し文、挿入されていた漢詩のみは白文で非常に新鮮なものに感じたのだ。後のクラス会に、敗戦・同校解散に際しての寄せ書きを持参せる友人があつて、私が作詩ルールを全く無視した七言絶句めいた漢字二十八字を載せていたのを発見して自ら驚いたが、同校での教育では漢詩鑑賞はあつたが作詩には踏み込まなかつたように思う。時に十四歳。

戦後しばらくは虚脱的だったが、戻った中学では漢文は廃止され、四年修学で進んだ旧制高等学校理科でも漢文は無かつた。つまり私はレ点、返り点で読む漢文には中一の時にしか接することが出来なかつたわけ。

早くから書道に興味を持ち、学業の傍ら独り筆を操ることを楽しみとした。縁あつて入会した書の結社(書海社)の主宰者松本芳翠先生は非常に漢詩漢文を能くされ、会報には漢詩

欄もあつたが、直接の指導者に恵まれなかつた私には取り付く島も無かつた。しかし書の素材として漢詩漢文には親しんだし、多くの漢詩集や「だれ漢」さえも枕辺には転がっていた。

進藤虚籟先生に出会えたのは約二十年前。本貫がともに山形県鶴岡市であつたことから目をかけてくれ、折に触れて作詩の指導を下さつたが、添削はすべて通信であつたから隔靴搔痒の感は免れなかつた。因みに虚籟先生は同じく鶴岡出身の土屋竹雨先生(漢詩界唯一の芸術院会員)の最後の弟子、松本芳翠先生も竹雨先生に指導を受けておられる縁がある。虚籟先生の逝去後、困つた私は縁を頼つて国士館大学鷺野先生の教室に入れて頂いた。仲間と共に対面教育を受け、実に驚きと共に新鮮な知識を得つつあり、全漢連などのコンクールに応募する気になつたのも、ここでのご指導のお蔭と思つている。「説明ではいけない」「視点を明確に」そして詰まる所は「もつと詩的に！」等々。今期の教室でダメの無かつた課題詩を一つ。

欲食香魚到上州(尤韻)

初夏驅車水畔遊 初夏 車を駆つて水畔に遊ぶ

銀鱗映日躍清流 銀鱗 日に映じ清流に躍る

漁翁倚岸垂綸久 漁翁 岸に倚りて垂綸久し

嘉會佳肴既獲不 嘉会の佳肴 既に獲しやいなや

上州桐生の書友に誘われ師に陪して一泊の清遊を楽しんだ時があつた。香魚づくめ料理は特に美味であつた。

講座で使用している画本は、江戸時代の絵師、

鈴木芙蓉の七言絶句の一篇。見事な筆裁きで詩を情景描写し、仮名文字の、独特な言葉まわしで、詩の解釈がなされている。見開き一枚の構成は、詩と絵を同時に見ながら、学べるように出来ている。この本を輪読の形で講座は進む。毎回四・五編を取り上げ、割り当てられた人が、選んだ詩の背景、諸々の解釈、作者の経歴等を調べ翌月発表する。担当した方の力量や個性で、素晴らしい資料が手元に配布される。そして詩に心を寄せ、心を尽くした発表に、耳を澄ませて聴き入る。住田先生が、補説を加えながら二時間。勿論講座に参加するだけで、輪読の発表を拒否する理由もある。

そしてこの講座の大きな特徴は、仮名の崩し文字で書かれた、解釈文を読み解くこと。最初は難解と思われたが、先生の「すぐになれます」の言葉を信じ学び重ねると『あら、不思議の事じゃ』

確かに読めてきました。

読み解いた江戸時代の書き言葉を、現在の言葉に書き換え、解釈文を完成させる。そこには、ジグソーパズルの一片を、漸く足元で見つけて、はめ込んだ時のような爽快感。

一年前受講を迷い、一年が過ぎると、新しい出会いの中で学んだ事柄が、ふつふつと小さな泡を上げ始めた。色香を加え、今後私の中でどのように醸されるか、楽しみな事じゃ。

・補足Ⅱ「事じゃ」唐詩選画本の中の仮名崩し文に

使用されている□語

二十六年後半のスケジュールをカレンダーに記入しましょう

●秋の研修会

春と同じ「選句方式」で三グループに分けて実施します。

・期 日 十月七日(火)／十月十五日(水)／十月二十二日(水)

・時 間 いずれのグループも午後一時～五時

・場 所 神奈川県近代文学館 二階 中会議室

・参加申込 本会報に同封した詩稿用紙に作品を記載の上、希望日も記入して、

左記宛郵送して下さい。

・詩稿提出先 〒二一六〇〇三三 川崎市宮前区宮崎六―五―九二 中島龍一宛

・提出締切 九月十九日(金)提出先着

●吟行会

六～七頁記事をご参照の上、奮ってご参加下さい。

・日 時 十月三十日(木)午前十一時より

・集 合 場 所 真鶴半島 石川先生の新詩碑前

・昼食および懇親会 「岩忠」(同地近傍)

・柏 梁 体 課題韻字による平仄不問の七言一句。任意提出ですが、

懇親会で秀句を選出します。

・申込・参加費 同封振込用紙による振込を以って受付とします。

参加費五〇〇〇円。

・申 込 期 限 九月三〇日(木)

●佩文齋詠物詩選七絶抄発行

輪読会で教材として使用している「佩文齋詠物詩選」から、七絶詩を抽出し押韻毎に整理したものや城田顧問が作成し、希望者に頒布すべく、編集・発行作業を進めています。頒布方法等詳細は、次号十七号でお知らせします。

●サークル交流会

期日 平成二十七年三月開催予定。詳細は次号十七号でお知らせします。

編集後記

八十歳七か月の三浦雄一郎氏が三度目のエベレストに登り最高齢の登頂者になった。二〇一三年五月のことである。何よりも感動することは登頂したこともそうであるが、登ろうと心に決めて実行に移したことである。下山中に疲労が極に達し死にかけたという。

ヒマラヤの最高峰エベレスト(8848米)が英国登山隊によつて初登頂されたのは、一九五三年で今から六十一年前のことである。この知らせがロンドンに達したのはエリザベス女王の戴冠式前夜だった。女王への最高の贈り物となり、全世界がこのニュースに感動した。女王は三十三歳のヒラリーにナイトの称号を与えてその快挙に応えた。英国はこれまでに人類未踏の難関に挑み何度も失敗を重ね、マローリーなど多くの犠牲者があつた。

ヒラリーとシエルパのエンジンは五月二十九日の朝、第九キャンプを出発し、零下二十七度の中、酸素補給の助けを借りて、五時間後に東南稜から頂上に達した。七千ccの肺活量を持つ体力と十人の隊員、四十人のシエルパ、七百人の運搬者の協力あつたことだった。(イタリアの超人ラインホルト・メスナーは一九八〇年に無酸素・単独初登頂、一九八六年に八千米全14座無酸素登頂達成している、これも凄いことだ)

ヒラリーの登山隊長ハントは「こういう事に心が高揚する限り、人類に明るい未来が開ける」と述べた。今の価値観・倫理観が「損か得か」「命より尊いものはない」と言われるが、人類には金や命よりも尊いものがあり、我々も年齢に関係なくそれを失わないように心がけてゆかなければと思ひ知らされる。

(川上・中島・三村・吉岡)